

「グローカル」ということ

アメリカの金融危機に端を発した不況があつという間に全世界に及び、日本の景気はもとより、地域や家庭にまで影響を及ぼしているのを見ても、グローバル化の波は、確実に地方の末端まで押し寄せてきています。同時に、地方分権改革も進行しています。硬い言い方になりますが、グローバル化を背景として、国民国家の役割が変化し、地方自治体の役割が大きくなると同時に、従来の行政システムに代わって多様な主体によるガバナンス（統治）が重視されるようになってきているのです。

そこで、「グローカル」です。この言葉は、「地球規模（グローバル）で考え、地域（ローカル）に根ざして行動すること」を一つの言葉で表した造語ですが、もともとは、一村一品運動で有名な平松前大分県知事が言い出されたものです。高松市がこれから、時代に即応した行政サービスの展開やまちづくりを進めていく上でも、この「グローカル」という視点が、ますます重要となってくるのは間違いありません。

地域活性化のために、イベントを仕掛ける場合にも、「グローカル」は有効です。ちょうど、市制施行120周年に当たる来年には、「第2回高松国際ピアノコンクール」と「瀬戸内国際芸術祭」という二つの大きな国際イベントが本市を中心に開催されることになっています。また、再来年には、日本では初めての開催となる「アジア太平洋盆栽水石大会」の誘致を目指して関係者が活動を行っています。

「ピアノ」は、世帯保有率の高さと多くの音楽家を輩出した土地柄など、「現代アート」は直島への玄関口としての地の利とイサム・ノグチの縁、高松市美術館など、「盆栽（フランスでも「ボンサイ」で通じるほどの国際語です）」は、鬼無と国分寺で松盆栽の全国八割のシェアを誇る圧倒的な生産高と、それぞれ道具立ては違いますが、いずれも高松の特徴的な地域資源を題材として国際的な舞台を設定し、世界に向けて情報発信をしようとするものです。開催に向けて、大いに盛り上げていきたいと思えます。

これからも、常に「グローカル」ということを念頭に置き、多文化共生のまちづくりを推進してまいります。